

映画の字幕表現の具体性に関する一考察

On the Degree of Specificity in Translated Movie Subtitles

牛江ゆき子 西尾道子
お茶の水女子大学 お茶の水女子大学

Abstract

Translated movie subtitles rapidly flash across the screen, keeping pace with actors' lines. They need to be concise while retaining their original meaning. To meet this need, some linguistic devices are employed during the translations, one of which is the change in the degree of specificity of expressions in the original lines and the translated subtitles. This paper explores 1) whether the original meaning is retained when the degree of specificity increases or decreases in the subtitles; 2) the role the change in the degree of specificity plays in the understanding of viewers; and 3) what kind of original expressions are likely to be candidates for the change in the degree of specificity. We argue that both increasing and decreasing the degree of specificity serve to reduce the processing cost of the viewers while retaining “dynamic equivalence” as defined by Nida (1964) between the original lines and the subtitles.

1. はじめに

1.1 本稿の目的

映画の字幕は俳優が台詞を言っている間だけ、起点言語 *source language* で言われた台詞が映画の画面に着点言語 *target language* で表示される翻訳文である。翻訳文でありながら字幕は一瞬で消えるものであり、人間の目が一度に処理できる文字数には制限があるため、1画面あたりの文字数に制限が課せられているものである。そのため字幕は簡潔な、かつ、わかりやすい表現で書かれていなくてはならない。と同時に受け手への効果ということから考えて起点言語での台詞が持つ意味内容や機能と等価とみなされうる意味内容・機能を持つ (Nida (1964) の概念である *dynamic equivalence* (ダイナミックな等価性) を保持する) ものでなくてはならない。¹ このような条件を満たさなくてはならない字幕には、いくつかの言語表現上の特徴がある。

一番顕著な特徴として、牛江・西尾(2002)では字幕に見られる文の要素の省略について考察し、主語・目的語・動詞など様々な文の要素が省略されていること、また省略は統語的な原則によるのみならず語用論的な原則によっても行なわれることを明らかにした。牛江・西尾(2003)ではもうひとつの顕著な特徴として、字幕に見られる置き換えについて考察した。文の要素が(例えば単語が名詞から動詞に)置き換えられる場合、文の種類が(例えば平叙文が疑問文に)置き換えられる場合など、多様な置き換えが見られること、また単に統語的な原則に基づいて置き換えが行なわれるばかりでなく、語用論的な原則に基づいて文の暗意 *implicature* が明意 *explicature* に置き

換えられる場合も多いことを明らかにした。

本稿では、これまでと異なった視点から、字幕に見られる表現の具体性に焦点をあて、起点言語の台詞の表現とは異なる「具体性の度合」を持つ表現が字幕において使われるという事象を考察の対象とする。² 具体性の度合の変更があっても起点言語の台詞と字幕の間に受け手への効果という点での等価性(以下、dynamic equivalence)が保持されるのかどうか、具体性の度合の変更はどのような理由・原則に基づいて行なわれ、それによってどのような効果が生まれるのかを、英語映画の日本語字幕と、日本語映画の英語字幕を対象として考察する。

本稿で想定されている具体性の度合というのは以下のように捉えられる。例えば、仮に起点言語の台詞で“Roses are blooming all over the place.” [バラがいたるところで咲いている]と言ったのに対し字幕では「花が咲き乱れている」と訳されている場合には、字幕における表現の具体性の度合が起点言語の台詞のものより低くなるとみなされる(本稿の議論ないし例文における表記の方法については、1.2 節で説明する)。バラは花の一種であるため、総称である花よりも具体的な表現と考えられるからである。逆に、起点言語で「外で遊んできた。」と言ったのに対し字幕では“We were skating outside.” [私たちは外でスケートをしていた]と(実際にやっていた遊びの種類である)「スケート」という単語を使って訳されている場合には、屋外での遊びという一般的な意味をもつ表現がその屋外での遊びの一種であるスケートと特定されているのであるから、字幕における表現の具体性の度合が起点言語の台詞のものよりも高くなるとみなされる。

起点言語の意味内容とほぼ等価な意味内容を持つ表現を使用するのが字幕製作の基本であるので、起点言語の台詞の表現と字幕の表現の具体性は同じになっていることが多いことが予想される。実際、大多数の字幕の表現は確かに起点言語の台詞と大体同じ具体性を持っている。(1)、(2)のような場合である。

- (1) Well, that was an interesting day. [それは興味深い一日でした]

なかなか興味深い一日でした。

(*Love Actually*: 146)

- (2) So—ahm—what do you need—something along the stationery line—are you short of staplers? [何が必要ですか—事務用品関係—ホチキスが足りないですか?]

事務用品関係? 例えばホッチキスとか?

(*Love Actually*: 210)

(1) においても(2)においても、名詞の具体性の度合いが揃っていて、“day” が「一日」として、“staplers” が「ホッチキス」として表現されている。動詞、他の品詞に関しても同じような現象が見られる。(3)のような例である。

- (3) Maria ... makes ... me laugh! [マリアは私を笑わせます]

マリアは私を 笑わせます

(*The Sound of Music*: 14)

具体性のレベルが同じであれば、基本的には本稿の考察の対象とならないが、起点言語と字幕との具体性のレベルが同じであっても、字幕に特別な工夫が見られるような場合には考察の対象とし、どのような工夫がどのような目的で行なわれているのか考えてみたい。以下、2 節で、字幕の表現の具体性が起点言語の台詞よりも低くなっている例を、3 節で、字幕の表現の具体性が起点言語の台詞よりも高くなっている例を考察し、4 節で具体性のレベルは同じであるが特別な工夫が見られる例について考察する。

1.2 データと表記方法

本稿で考察する英語映画の台詞と日本語字幕のデータは、*Dave*、*Love Actually*、*The Sound of Music* の 3 本の映画から収集した。英語の台詞は、映画の台詞を文字化して掲載している本から収集し、日本語字幕は映画の DVD の日本語字幕から収集した。³ 日本語映画の台詞と英語字幕のデータは、『となりのトトロ』、『*Shall we ダンス?*』、『*スウィングガールズ*』の 3 本の映画から収集した。日本語の台詞と英語字幕は共に、それぞれの映画の DVD の日本語音声(および日本語字幕)と英語字幕から収集した。⁴

例を挙げる際は、まず起点言語の台詞を挙げ、次に着点言語の字幕の表現を挙げる。英語の台詞と英語字幕の表現の後にはそれぞれを直訳したものを[] で囲んで記す。それぞれの例の最後に映画名を記す。英語映画の場合、映画名の後に、英語の台詞を掲載している本のページを示す。日本語映画の場合、映画名の後に、DVD の時間表示を記載する。

英語の台詞の表記は、台詞を掲載している本の表記を用いる。日本語の台詞の表記は、DVD の日本語字幕(日本語音声と合致)の表記を用いる。字幕の表現を挙げる際には、スペースで字幕上のスペースの存在をあらわし、「/」で字幕が 2 行にわたる場合の行替えをあらわし、「//」で字幕が二枚以上にまたがっている場合の次の字幕への移行をあらわす。台詞や字幕の一部を省略する場合には「[...]」で省略箇所を示す。「—」と「…」は、字幕においてもともと使用されている記号で、前者は次の字幕へ続くことをあらわし、後者は言いかけた時や言葉が途切れた時などに使用される記号である(岡山 2004)。例の一部分のみが議論の対象となる場合には、議論の対象となる部分に下線を施す。文脈を明らかにするために複数の登場人物の台詞を挙げる場合には、台詞の話し手が誰であるかを、台詞の前に記す。

地の文において台詞や字幕の表現を挙げる際は、日本語の表現は「 」で囲む。英語の表現は“ ”で囲み、直訳を [] で囲んで記す。例の一部分のみが議論の対象となる場合は、その部分に下線を施す。

以下の議論において、映画の起点言語の台詞を単に「台詞」と呼び、着点言語の字幕を「字幕」と呼ぶ。映画の中で本稿の議論の対象となる台詞を言っている登場人物を「話し手」、その台詞が向けられている登場人物を「聞き手」、着点言語の字幕を読む、映画の視聴者を「受け手」と呼ぶ。

2. 字幕の表現の具体性が台詞よりも低い場合(一般化)

字幕の表現の具体性が台詞よりも低くなる事象(以下、「一般化」と呼ぶ)は、今回考察した英語映画の日本語字幕において多く見られた。日本語映画の英語字幕においても少数ではあるが例があった。2.1 節において英語映画の日本語字幕における一般化の例を、2.2 節において日本語映画の英語字幕における一般化の例を考察する。

2.1 英語映画の日本語字幕における一般化

本節では、英語映画の日本語字幕に見られる一般化の典型的な例をとりあげる。それぞれの例について、一般化が行われても *dynamic equivalence* が保持されるのかどうか、どのような理由・原則によって一般化が行なわれているのか、また一般化によってどのような効果が生まれるのかについて考察する。

(4) ~ (6)は固有名詞や固有名詞を含む表現の一般化、(7)、(8) は特定の文化や社会に特有なものごとの一般化、(9)~(11)はその他の一般化の例である。

a) 固有名詞や固有名詞を含む表現の一般化

(4) I learned on the IBM, okay? Then they put me on the Wang. [IBM ので練習したのよ。それが、そこでは Wang を使えと言われたの]

IBM ので/ 散々 練習したのに— // 別の機種を・・・

(Dave: 12)

(4) では、会社を解雇された話し手はその理由を説明している。台詞では“the Wang” [Wang 社製コンピュータ]というコンピュータの機種名(固有名詞)が挙げられているが、字幕では「別の機種」となっている。「別の機種」は、この文脈では IBM 社製コンピュータ以外の機種を指すので、そのうちの一機種名である“the Wang”よりも一般性が高い。よって、一般化が生じていると言える。この字幕全体についてみると、Wang という具体的な機種名を出さなくとも、台詞で話し手が聞き手に訴えている内容(すなわち、就職するにあたってコンピュータをしっかりと練習したにもかかわらず、自分が練習した機種と就職した会社の機種とが異なっていたためにうまく使いこなせずに解雇されたという解雇理由)は十分に伝わるので、台詞と字幕とで *dynamic equivalence* は保持されていると言える。解雇理由の説明において Wang という具体的機種名は必要不可欠な情報ではない。しかも、IBM は日本でもよく知っているのに対し、Wang という会社および機種は日本では知られていない。したがって、字幕で Wang という機種名が挙げられると、受け手は、重要な情報ではないにもかかわらず、文脈からそれがコンピュータの機種名であることを推測しなくてはならなくなる。一般性の高い「別の機種」という表現が用いられることにより、受け手はそのような推測をする必要がなくなり、余分な処理労力が省かれる。

- (5) Okay, we got the nurses for fifty grand a piece and the doctors for a hundred. The older guy wanted head of the CDC. [看護婦たちは一人 5 万ドル、医者たちは 10 万ドルで(口止めを)した。年長の医者は CDC の長(の地位)を(口止め料として)要求した]
看護婦は 5 万ドル/ 医師は 10 万ドル// 栄転付きで
(Dave: 31)

(5) では、話し手は自分たちが看護婦と医師にいかにか口止めをしたかを説明している。台詞では“head of CDC (=Center for Disease Control and Prevention)” [CDC (伝染病予防研究所)の長(の地位)] という具体的な栄転先の機関名(固有名詞)と地位をあらわす表現が用いられているのに対し、字幕では単に「栄転」という一般性の高い表現となっているので、一般化が生じていると言える。CDC という機関は前後の文脈においては登場せず、この台詞のみで言及されている。したがって、台詞の主旨は、医師の口止めにはお金だけではなく高い地位も与えなくてはならなかったということであり、それは、機関名と地位を具体的に挙げなくとも、「栄転」という一般性の高い表現を用いることによってもあらわされる。したがって、台詞と字幕とで **dynamic equivalence** は保持されていると考えられる。日本では CDC は一般に知られていないので、字幕で「CDC の長の地位」という表現が用いられると、受け手は CDC とは何か、CDC の長の地位とはどのようなものなのか、文脈から推測しなくてはならない。口止めの話という文脈から何らかの高い地位であろうという推測は可能であるが、一般的な「栄転」という表現が用いられていれば、受け手は、文脈からそのような推論を行う必要がなくなり、解釈に余分な労力をかけなくてすむ。

- (6) For this I had to call Paris, Rome and Stockholm. [このためにパリとローマとストックホルムに電話をかけなくてはならなかった]
遠距離電話を何度かけたか
(The Sound of Music: 82)

(6) では、自分が音楽祭に出場させようと画策していたグループを他のプロモーターに横取りされてしまった話し手が、横取りされたことを嘆き、このグループ獲得のために自分がどれだけ苦労してきたかを話している。台詞では話し手が電話をかけた都市名(固有名詞)が3つ挙げられているが、字幕では、都市名は省略され「遠距離電話を何度もかけた」という一般的な表現が使われている。この台詞の主旨は、このグループ獲得のためにパリやローマやストックホルムといった都市に遠距離電話をかけるという、時間もお金もかかる努力をしてきたということであり、それは電話をかけた具体的な都市名を挙げなくとも「遠距離電話を何度かけたか」という表現によって(より端的に)あらわされる。したがって、**dynamic equivalence** は保たれていると考えられる。台詞で挙げられている都市は日本でもよく知られている都市ではあるが、字幕は、都市名を省略して代わりに一般的な表現を用いることにより、字数を節約するとともに、都市名から割り出されるべき台詞の主旨を割り出しやすくしている。

b) 特定の文化・社会に特有・特徴的なものごとの一般化

(7) Basic really—find a venue—over-order on the drinks—bulk buy the guacamole and [...] [基本的なこと—会場を探して、飲み物を十分すぎるほど注文して、グアカモレを大量に買い込んで・・・]

会場を探して飲み物と/ オードブルを安く買い込む

(*Love Actually*: 104)

(7) では、会社社長が部下に、職場のクリスマスのパーティーの準備のしかたを説明している。台詞ではグアカモレ(アメリカやイギリスでオードブルやスナックとして好まれ、スーパーマーケットなどでも売られているメキシコ料理)という料理の名前が具体的に挙げられているのに対し、字幕では「オードブル」という一般性の高い表現が用いられている。字幕においてはオードブルの種類は特定されないが、台詞と字幕のいずれにおいても、パーティーのためにどのような種類のものをどのように用意するかは理解できるので *dynamic equivalence* は保たれていると考えられる。日本ではまだ一般的には知られていない「グアカモレ」という料理名が字幕で使われると、受け手はそれが何を指すのかわからず、この文脈では、食べ物かどうかさえ見当がつかない可能性がある。「オードブル」という一般性がより高い表現が用いられることにより、受け手は、どのような種類のものを大量に買い込むのかを、推理を働かせなくても理解することができる。

(8) I would've taken a bullet for you. [あなたの代わりに銃弾を受けたでしょう]

君のためなら死ねる

(*Dave*: 113)

(8) は、大統領の護衛が大統領の影武者を務めた主人公(Dave)に向かって言った言葉である。台詞では“take a bullet” [銃弾を受ける]という表現が用いられているが、字幕では、それよりも一般性の高い「死ぬ」という動詞が用いられている。しかし、いずれの表現が用いられても、自分が命を落としてでも Dave を守る覚悟ができていたという、話し手が聞き手に対して伝えたい内容(および話し手が Dave に対して抱くようになった信頼と尊敬の念)は伝わるので、*dynamic equivalence* は保たれている。“take a bullet” という表現は、暗殺が銃撃によるものであることが多いというアメリカ社会に特徴的に見られる状況を反映している。しかし、この台詞においては、自分が命を落としてでも守る覚悟ができていたということが最も伝えたいことであり、銃弾を受けるという具体的な事象(=相手を守るために自分がいかに命を落とすか)は重要ではない。ナイフを持った者に襲われても身代わりになる覚悟があったはずだからである。字幕では、台詞の表現よりも一般性の高い表現が用いられることにより、台詞の主旨がより明確にあらわされている。

c) その他の一般化

- (9) Mabel says it's too far on the bus. Jennifer's boss tried to hit on her again. [メイベルは(職場が)バス通勤で遠すぎると言っています。ジェニファーの上司はまた彼女にせまろうとしました]
 メイベルは通勤問題 / ジェニファーはセクハラ
 (Dave: 12)

(9) では、臨時社員斡旋所の所員が、外出から戻った所長に対し、相談に訪れた二人の女性が職場についてどのような問題を訴えようとしているかを説明している。台詞では、相談者の訴えが具体的に述べられているが、字幕では、一般的な表現により、相談者が抱える問題の本質(種類)が示されている。この文脈は、相談者の訴えを既に聞いた話し手が、訴えの内容を所長に手短かに説明しようとしているところなので、字幕のように問題の種類を述べるだけでも十分な情報と考えられ、dynamic equivalence が保たれていると言える。字幕では、一般化によって、問題の本質が簡潔かつ明示的に示され、受け手の理解が容易になっている。

- (10) Well, we're not the richest of girls, so we just have a little bed, and no couch—so you'd have to share with all three of us... [私たちはとびぬけて裕福な女の子ではないので、小さなベッド一つしかなく、(予備のベッドとして使える)ソファはない—だからあなたは私たち三人とベッドを共有しなくてはなりません]
 私たち リッチじゃないから/ ソファもなくって// ベッド1つなの
 (Love Actually: 238)

(10) は、バーで出会った青年を自分たちが住むアパートに招待した3人の女の子の一人が言った台詞である。台詞の“the richest of girls” [とびぬけてリッチな(裕福な)女の子] が、字幕では「リッチ」という一般性の高い表現になっている。しかし、台詞の“not the richest of girls” はリッチではないことを遠回しに伝える表現であり、字幕の「リッチじゃない」と同じことをあらわしている。Dynamic equivalence は保たれていると言える。台詞の表現は、最上級の形容詞や of という前置詞をとまなう前置詞句を使った複雑な表現であり、直訳すると長くなるが、字幕では「リッチ」という単純な形容詞一つになり、解釈にかかる労力が小さくなっている。

以上の一般化の典型的な例の考察から、台詞の表現が字幕において一般化されても、台詞の主旨は伝わるようになっており、dynamic equivalence は保持されていると言える。本節でみた一般化には、1) 台詞に用いられている固有名詞や特定の文化・社会に特有のものごとをあらわす表現が受け手に理解し難い場合に、受け手が理解しやすい表現にする、2) 台詞の具体的な表現から受け手が割り出すべき台詞の主旨を明確にする、3) 台詞の意味内容を簡潔に要約する、4) 表現を簡潔にするなどの場合があったが、いずれの場合も、台詞の主旨の解釈を容易にし、受け手の処理労力を小さくしていると言える。

2.2 日本語映画の英語字幕における一般化

本節では、日本語映画の英語字幕における一般化の例をみて、dynamic equivalence が保持

されているか、どのような理由・原則によって一般化が行われているのか、一般化によってどのような効果をもたらされるかを考察する。

(11)は固有名詞の一般化、(12)、(13) は日本文化に特有のものや事象をあらわす表現の一般化の例である。

a) 固有名詞の一般化

(11)この雪で東校 来れなくなつて あんただち 繰り上げで出られるごどになつたんだって

The snow held up another band, / so you get their spot. [雪で他のバンドが遅れて、あなたたちが彼らの代わりに出演できることになりました]

(『スウィングガールズ』01:28:02)

(11)では、台詞では「東校」という固有名詞(おそらく架空の名前)が使われているが、字幕では“another band” [別のバンド] という、より一般的な表現が用いられている。この場面では、大雪により音楽祭に来られなくなったバンドがあったために、音楽祭への繰り上げ出場が可能になった、ということがもっとも重要な情報であり、来られなくなったバンドの学校名は重要ではない。一般化により、情報量にわずかな違いは生じるものの、伝わる意味は、台詞と字幕とで基本的に同じであると言える。字幕は、学校名を出さずに一般的な表現を用いることにより、重要な情報のみ与え、受け手の解釈を容易にしている。

b) 日本文化に特有・特徴的なものごとをあらわす表現の一般化

(12) お茶漬でも食べる？

Something to eat? [何か食べるものは(ありますか) ?]

(『Shall we ダンス?』00:05:09)

(12) は、お酒を飲んで帰宅した夫に対して、妻が言った台詞である。台詞では「お茶漬」という具体的な料理名が出ているが、字幕では、“something to eat” [何か食べるもの]という一般的な表現になっている。お茶漬という例を挙げているかどうかは異なるものの、どちらも、何か食べたいかを尋ねているという機能は同じであり、dynamic equivalence は保たれていると言える。お茶漬という料理は英語圏にはなく、お茶漬にあたる英語表現もない。お茶漬が日本ではお酒を飲んだあとによく食べられるということももちろん英語圏では知られていない。そこで、説明的な訳をつけたとしても、長くなるのみならず、この料理名がなぜこの妻の台詞に出てくるのか、受け手には理解できず、それを割り出そうとして余分な処理労力がかかってしまう可能性がある。具体的な料理名が省略されて一般化されることにより、台詞の意図は受け手に伝わり、かつ、余分な処理労力が受け手にかかることが避けられる。

(13) だって たまには飲んで帰ってきてもらわないと 何となく気が引けるじゃない？

He really should get out / and enjoy himself more often. [彼は本当にもっと出かけて楽しむべきだわ。]

(『Shall we ダンス?』00:06:20)

(13) では、妻が娘に向かって、いつも仕事と家庭サービスのみ(自宅と職場を往復するだけの)のまじめな夫が前の晩に珍しく飲んで帰って来たことについて、夫がたまには飲んで帰ってきてくれる方が妻としては気持ちが楽であると言っている。台詞では「飲んで」と楽しみの内容を具体的に述べる表現が用いられているが、字幕では一般的な表現“enjoy himself”[楽しむ]が用いられている。妻の台詞は、夫に外でお酒を飲んでほしいと言いたいわけではなく、仕事と家庭以外に少しは自分の楽しみを持ってくれた方が妻として気持ちが楽であると言っている。お酒を飲む以外の楽しみであっても構わない。したがって、台詞と字幕の間には dynamic equivalence が保たれている。仕事帰りに職場の同僚や友人と、あるいは一人でお酒を飲むということは、日本では働く人々の楽しみとして社会的に認知されているが、英語圏では、一般的にアルコール自体も飲酒という行為も否定的にとらえられることが多く、夫がリラックスしたり、何かを楽しんだりすることには賛成の妻であっても、夫がお酒を飲んで帰って来ることには嫌悪感を示すことが多い。⁵ そのため、台詞の表現が英語字幕にそのまま訳されると、受け手は、この妻の心理が理解できなかつたり、何か特殊な事情があるなどと想像を働かせてしまったりする可能性がある。英語字幕において“enjoy himself”という一般的な表現が用いられることにより、文化的な違いに由来するこのような疑問や誤解が生じることが避けられている。

本節の例をみると、日本語映画の英語字幕においても、英語映画の日本語字幕の場合と同様に、一般化が行われても、台詞によって意図されることは字幕によって伝わるようになっており、dynamic equivalence は保持されている。一般化は、台詞の解釈を容易にしたり、文化的な違いに由来する疑問や誤解が生じるのを防いだりすることにより、受け手の処理労力を軽減する働きをしている。

2. 1 節、2. 2 節の考察から、字幕にみられる一般化という事象は、dynamic equivalence を保ちながら、台詞の意味の解釈を容易にし、受け手の処理労力を小さくする働きをするものである考えられる。

3. 字幕の表現の具体性が台詞よりも高い場合(具体化)

一般化と反対に、字幕の表現の具体性が台詞の具体性よりも高くなる事象(以下、「具体化」と呼ぶ)も見られる。本節では、具体化の典型的な例をみながら、具体化が行われても dynamic equivalence が保持されるのかどうか、具体化はどのような理由・原則によって行なわれ、またそれにどのような効果が生まれるのかを考察する。3. 1 節において英語映画の日本語字幕における具体化の例を、3. 2 節において日本語映画の英語字幕における具体化の例を考察する。

3.1 英語映画の日本語字幕における具体化

本節では、英語映画の日本語字幕にみられる具体化の典型的な例について考察を行う。(14)は台詞中の名詞句が具体化されている例、(15)は台詞中の形容詞が具体化されている例、(16)は台詞中の動詞句が具体化されている例、(17)~(19)は台詞中の一つの節全体が具体化されている例である。

- (14) Well, some people think we ought to be German, and they're very mad at those who don't think so. [私たち(オーストリア人)はドイツ人になるべきだと考える人たちがいて、彼らはそのように考えない人々に対しても頭にきている]
ドイツびいきの人たちは/ お父さんに批判的だ
(*The Sound of Music*: 46)

(14) は、青年が恋人に話している台詞である。台詞の“those who don't think so” [そのように考えない人々]という一般的な表現に対して、字幕では「お父さん」という具体性の高い表現が用いられている。台詞では、表面上は、一般論が述べられている。しかし、この台詞で話し手は、単に一般論を述べたいのではなく、恋人に対し、オーストリア人もドイツ人になるべきだと考えない彼女の父親はそう考える人々の怒りを買うので、その身が心配だということ伝えようとしている。字幕は、台詞から聞き手(および受け手)が推論するべき話し手の意図を明示しているので、dynamic equivalence が保たれていると言える。具体化により、受け手は一般論からそれが聞き手の父親にあてはまるという推論を行う必要がなくなるので、処理労力が軽減される。

- (15) We got what we came for and our special relationship is still very special. [我々は訪問の目的を果たし、しかも私たちの(=米英の)特別な関係は依然とても特別だ]
我々は目的を達成し—// しかも友好関係は無事 保った
(*Love Actually*: 150)

(15) は、訪英した米国大統領が記者会見において訪英の成果について述べた言葉である。台詞の“special relationship” [特別な関係] が字幕では「友好関係」に言い換えられ、形容詞“special” が「友好」へと具体化されている。この場面で大統領が意味している両国間の“special”な関係とは友好的な関係のことであるので、台詞と字幕の間には dynamic equivalence が保たれている。字幕は具体化により、受け手が、どのような特別な関係であるかを文脈から推測する労力を省いている。

- (16) I'll give you anything you ask for—as long as it's not something I don't want to give. [あなたが求めるものは何でもあなたにあげよう。私があげたくないものでない限り。]
私は譲歩するよ/ 譲歩したくない問題以外ならね
(*Love Actually*: 148)

(16) は、米英の首脳の間談が米国大統領の強硬姿勢により不調に終わった日の夜に、米英首脳が一日をふり返って話をしている際に、米国大統領が英国首相に言った言葉である。台詞中の動詞句 “give you anything you ask for” [あなたが求めるものは何でもあなたにあげる] が、字幕で具体的に「譲歩する」になっている。“give you anything you ask for” は一般的で、聞き手が求めるものが何かを具体的に示さず、したがって、何を与えるのかについても具体的には示していない。しかし、この場面において英国の首相が望むのは米国側の譲歩なので、台詞と字幕の間には dynamic equivalence が保たれている。字幕の表現は、台詞で一般的に述べられていることをこの場面で問題となっているものに絞り込むことにより、受け手がこの場面の状況やその他の背景の知識などから適した解釈を割り出す労力を省いている。

(17) Well, uh, nothing was the same when you were away. [あなたがいない間、何もかも(あなたがいない時と)同じではありませんでした]

あなたがいないと/ 家中が暗い

(The Sound of Music: 158)

(17) では、話し手が、子供たちの家庭教師に話しかけている。台詞では、“nothing was the same” [何もかも同じではなかった(=すべてが違っていった)]という一般性が高い表現が用いられ、具体的に何がどのように違っていったのかは述べられていないが、字幕では、「家中が暗い」として状況が具体的に述べられている。家庭教師がいない間、普段と違っていった点はいろいろあったと考えられるが、「家中が暗い」は違っていったことの中でも代表的なものを挙げているので、dynamic equivalence は保たれていると言える。台詞の表現からはさまざまな可能性が推測でき、解釈は受け手の判断に委ねられる。すなわち、受け手に文脈や背景知識から推論をする処理労力がかかる。しかし、字幕においては、「家中が暗い」という具体性の高い表現が使われることにより解釈が一つに決められるので、受け手の処理労力が軽減されている。

(18) Max: I want those children in the Festival. Elsa, this is important to Austria. [あの子たちを音楽祭に参加させたい。エルザ、これはオーストリアにとって大事なことだ]

天使の声を音楽祭に/ 出すことは国の名誉だしな

Baroness: It wouldn't do you any harm either. [それはあなたに害をもたらもしないでしょう]

あなたにもお金が入る

(The Sound of Music: 130)

(18) の台詞の “It wouldn't do you any harm either” [それはあなたに害をもたらもしないでしょう] は、一般性の高い表現で、聞き手にどのような状況が生じるかを具体的に示していないが、字幕では、「お金が入る」という具体的な表現により、聞き手に生じる状況が具体的に述べられている。話し手(Baroness(男爵夫人))は、この台詞で、国のために無私の行為をしようとしているかの

ように話す聞き手 (Max) がお金儲けをたくらんでいることを間接的に指摘している。お互いのことをよく知っている話し手と聞き手との間では、具体性の低い表現が用いられても、お互いについての知識から、話し手の意図は理解される。台詞の表現の裏に読みとられるべき話し手の意図と、字幕表現の内容は同じであるので *dynamic equivalence* は保たれていると言える。受け手は、これまでの文脈だけから、台詞の裏にこめられている話し手の意図を一瞬のうちに推測できるとは限らない。そこで、字幕は、具体性の高い表現を用いて話し手の意図を明示することにより、受け手の理解を容易にしている。

(19) Sarah: I suppose it's his job to dance with everyone, isn't it? [皆と踊るのが彼の仕事なのでしょね]

Karen: Some more than others. [ある人たちとは他の人たちとよりももっと(踊っている)彼女とだけみたい。]

(*Love Actually*: 194)

(19) はパーティーでの会話である。Karen の夫の Harry は部下の女性 Mia といちゃついている。それを Harry のもう一人の部下である Sarah と Karen が見ていて、Sarah が Karen に、Harry は社長だから、会社の皆と(順番に)踊っているのじゃないかと言ったのに対し、Karen は、Harry が時間をかけて踊っている人とそうでない人とがいると言っている。台詞では、Harry が誰と特別に時間をかけて踊っているのか明示されていないが、字幕では「彼女とだけみたい」となり、相手が「彼女(=Mia)」一人に限定されている。Karen が台詞ではおそらく意図的にあいまいに述べている(しかし、聞き手にも映画を観ている受け手にも明らかである)事柄(=Mia とだけ時間をかけて踊っているということ)を字幕は具体的に述べているにすぎないので、*dynamic equivalence* は保たれていると言える。字幕は、台詞では受け手の推論に任されている事柄を具体的に述べることにより、受け手が自ら推論して割り出す労力を省いている。

本節の具体化のいずれの例においても、*dynamic equivalence* は保持されており、英語映画の台詞の日本語字幕における具体化は、台詞に一般性の高い表現が(しばしば、話し手によって意図的に)用いられている場合に、台詞から推論されるべき具体的な内容を明示することにより、受け手の処理労力を小さくしていると考えられる。

3.2 日本語映画の英語字幕における具体化

本節では、日本語映画の英語字幕に見られる具体化の典型的な例について考察を行う。

(20) 楽しみがちょっと延びるだけだよ

It just means you'll be home next weekend. [次の週末に帰宅するというだけのことだ]

(『となりのトトロ』 01:22:13)

(20) は、入院中に風邪をひいて一時帰宅が急に延びたため、子供たちに心配をかけて申し訳な

いと思っている母親に対して父親が言った言葉である。台詞では、「楽しみ」と「ちょっと」という一般的な表現が用いられているのに対し、字幕では楽しみの内容と楽しみが延びる期間が具体的に述べられている。台詞で述べられている事柄と字幕で述べられている事柄は、相互に文脈からほぼ割り出せるので、dynamic equivalence は保たれていると言える。台詞では、誰のどのような楽しみが、どのくらい延びるのかは述べられていないが、字幕では、これらの具体的な情報が明示されることにより、受け手がこれらを文脈から割り出す労力が省かれている。

(21) メイがお世話になりました。これからもよろしく願いいたします。

Thank you for all you've done for Mai. // Please protect her forever. [メイにして下さったことすべてについて感謝します。どうかこれからもずっと彼女を守って下さい]

(『となりのトトロ』 00:40:38)

(21) はメイの父親が森の榎の木に向かって言った台詞である。台詞の「よろしく願いいたします」は、相手に内容を具体的には述べずに世話をしてもらうことを依頼するあいさつの表現である。字幕では何を頼みたいのかを文脈から推論して、明示している。台詞も字幕も、聞き手に対する依頼表現であり、頼みたい世話の内容を受け手に文脈から推論させるか、明示的に述べるかが異なるだけなので dynamic equivalence は保たれていると言える。「よろしく願いいたします」は日本語に特徴的にみられるあいまいな(＝一般性が非常に高い)表現である。英語では、何を頼みたいのかを明らかにしないと自然な表現にならない。無理にあいまいなまま英訳すると不自然でわかりにくい表現となる。そこで、英語字幕は、頼みたい内容を具体的に述べ、自然な表現とすることで、受け手の解釈を容易にしている。

(22) メイ:お父さーん メイ おねえさんみたい？

Daddy, this hat! / Am I a grownup if I wear it? [おとうさん、この帽子(見て)。これをかぶると私は大人(に見える)かしら？]

おとうさん: うん お弁当さげて どちらへ？

It looks that way. / Where are you going? [そう見えるよ。どこに行くの？]

メイ:ちょっとそこまで

Going to get some flowers. [花を摘みに行くの]

(『となりのトトロ』 00:26:37)

(22) は庭先での親子の会話である。台詞の「ちょっとそこまで」という表現も、どこに何をしに出かけるのかを具体的に述べない、日本語に特徴的に見られるあいまいな表現である。普通は幼い子供はこのような表現を使わないが、帽子をかぶって「おねえさん」になったつमोरの4歳のメイは大人のまねをしてこの表現を使っていると思われる。英語でも “Out” [外へ] ないし “Just out” [ただ外に] という意味的にはこれとほぼ対応する表現があるが、これらは行き先を尋ねる質問に対するかなり乱暴な返答と解釈される。⁶ そこで、英語字幕では、英語でのごく自然な返答となるように、

具体性を高め、出かける目的を明示している。この場面の後、メイが庭で花を摘んでいる場面が出てくるので、“going to get some flowers” [花を摘みに行く]としている。台詞と字幕とで情報の具体性は異なるが、どちらも、行き先を尋ねられた際のそれぞれの言語での自然な返答となっており、しかも会話はここで終わっていて、行き先や目的はこの後の話の展開にとって重要な情報ではないので、dynamic equivalence は保たれていると言える。

(20)-(22) のいずれの例においても dynamic equivalence が保持され、受け手の処理労力が軽減されている。(20) では一般性が少し高い台詞の内容が具体化されて受け手の処理労力が軽減されており、(21)、(22)では、日本語に特徴的に見られる一般性が非常に高いあいまいな表現が、字幕において具体化され、英語の会話として自然で受け手が理解しやすい表現となっている。

3. 1節、3. 2 節の考察から、字幕にみられる具体化という事象は、一般化とは具体性の変化の方向は反対であるにもかかわらず、一般化と同様に、dynamic equivalence を保ちながら、台詞の解釈を容易にし、受け手の処理労力を小さくする働きをされると考えられる。

4. 具体性が同レベルの言い換え

字幕において、具体性のレベルは台詞の表現と同じであるが特別な工夫がみられる言い換えが行われている場合がある。本節では、このような具体性のレベルが同じである言い換えの例について、台詞と字幕とで dynamic equivalence が保たれているかどうか、言い換えはなぜ行われるのか、それにはどのような効果があるかを考察する。(23)、(24) は英語映画の日本語字幕の例であり、(25)は日本語映画の英語字幕の例である。

(23) What is with President Mitchell lately, huh? Has this guy been having too many happy meals for lunch or what? [大統領は最近どうしたのだ？お昼にハッピーミールを食べ過ぎているのかな？]

最近の大統領は/ どうしちゃったんだ？// ガソリンでも飲んだのかもよ

(Dave: 51)

(23) は、テレビのトーク番組のホストが、突然生まれ変わったように精力的に活躍し始めた大統領の大変身の理由について、視聴者の笑いをとるために発したコメントである。台詞の“having too many happy meals” [“happy meal” の食べ過ぎ]と日本語字幕の「ガソリンを飲む」は、どちらも普通ではない飲食物の摂取をあらわしており、同レベルの言い換えと言える。“happy meal”は二重の意味を持ち、マクドナルドの子供向けランチの商標であるとともに、[アルコール付きの食事]という意味もある。前者は若返りの説明となり、後者はアルコールの効果がエネルギーギッシュな活躍の説明となる。日本語の表現で、このような二重の意味を持つ“happy meal” にあたるものは存在しない。また、日本で米国のマクドナルドの Happy Meal にあたるものに用いられている「ハッピーセット」という表現を用いたとしても、マクドナルドのことを知らない人には理解できない。日本語字幕の

「ガソリンを飲む」であれば、ガソリンは車の燃料であるので、エネルギッシュな大統領への、信じがたい大変身の理由についての突拍子もない推測として理解することが可能である。台詞も字幕も、大統領の大変身の理由についての突拍子もなく大胆な推測をあらわすと解釈できるという点で、dynamic equivalence が保持されていると言える。

(24) Rolfe: Eager young lads [熱心な若者や]

And roués and cads [好色男や下劣な男どもが]

Will offer you food and wine. [君に食事とワインをご馳走しようとする]

プレイボーイどもが/ 甘い言葉をささやく

(*The Sound of Music*: 46)

(24) は、17歳の青年が一つ年下の16歳の恋人に向かってうたう歌の一部である。台詞の“offer you food and wine” [君に食事とワインをご馳走しようとする]も、字幕の「甘い言葉をささやく」も具体的な行為をあらわしており、具体性のレベルは同じである。どちらも起点文化と着点文化それぞれにおいて男性が女性の気を引くために行う典型的な行為をあらわしているのも、dynamic equivalence が保持されていると言える。“food and wine” は、西洋では切り離せないほど強く結びついているものであり、表現としても定着している。女性の気を引くために food and wine に誘うのも普通のことである。一方、日本では食事とワインという組み合わせはそれほど当たり前ではなく、また、まだ16歳の(未成年の)女性がワイン(アルコール飲料)を飲むことは法律上も社会的にも認められていない。そこで、日本語字幕では、「甘い言葉をささやく」という、日本で女性の気を引くための典型的な行為とみなされる行為をあらわす表現を用いて、受け手がより自然に受けとめられるようにしていると思われる。

(25) いただきます

For what I'm about to receive... [今からいただくものに・・・]

(『Shall we ダンス?』00:05:48)

(25) は、朝早く一人で朝食をとる男性が食事を始める前に言った台詞である。台詞の「いただきます」は食事を始める際のあいさつであり、英語字幕の“For what I'm about to receive...”も食事を始める際の祈り(grace)の一部である。⁷ どちらも食事を始める際のあいさつであるので、具体性が同レベルの言い換えであり、機能が同じなので dynamic equivalence が保持されていると言える。異なる文化ではあいさつの言葉も異なるので、直訳したのでは、受け手はその機能が理解できない。英語字幕では、英語圏文化で「いただきます」と同じ機能を担う表現に言い換えることにより、受け手の理解を容易にしている。

本節においては、字幕において、台詞と具体性のレベルは同じである言い換えが行われている例を考察し、これらが、dynamic equivalence を保持していること、着点言語の文化では理解されにくかったり受け入れにくかったりするものをあらわす表現を理解しやすいものをあらわす表現に言

い換えたり、起点言語の文化に特有のあいさつの表現を着点言語で同じ機能を担う表現に言い換えたりして、受け手の処理労力を軽減していることをみた。dynamic equivalence を保持しつつ、受け手の処理労力を軽減するという点で、これまでに見てきた一般化および具体化と共通していることがわかった。

5. まとめ

本稿では、英語映画と日本語映画の起点言語の台詞の表現と、着点言語の字幕の表現とで、具体性にずれがある場合があることに注目し、dynamic equivalence の保持の有無、そのような事象が生じる理由とその効果について考察を行った。その結果、字幕の表現の具体性が台詞よりも下がる場合(一般化)も上がる場合(具体化)も、台詞と字幕表現によって直接的あるいは間接的にあらわされる意味内容や台詞と字幕表現の機能は等価であり、dynamic equivalence が保持されていることがわかった。また、一般化の場合も、具体化の場合も、字幕表現は、台詞によって間接的にあらわされる意味を明示したり、起点言語特有の台詞の表現を着点言語において自然でわかりやすい表現にしたりすることにより、受け手の処理労力を軽減していることがわかった。具体性のずれの方向がまったく逆である一般化と具体化という事象が、どちらも dynamic equivalence を保持し、共通の効果を持つことが明らかとなった。

さらに、具体性のレベルが同じであるが特別の工夫がなされている場合についても考察をし、この場合もまた、dynamic equivalence が保持され、受け手の処理労力が軽減されていることがわかった。

謝辞： 本稿の考察にあたって、ダイアン・ナガトモ氏に、英語表現の意味や用法、英語圏の文化について情報の提供を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

著者紹介： 牛江ゆき子(USHIE Yukiko)お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。専門は英語学(テキスト言語学)。主な論文に「定冠詞と不定冠詞の表出的機能について」『英語青年』第150巻/第3号:178-180.2004年)など。

連絡先: ushie.yukiko@ocha.ac.jp

西尾道子(NISHIO Michiko)お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。専門は英語学(語用論)。主な論文に「日英同時通訳における情報構造の保持と通訳文の語順に関する一考察」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』第53巻171-183.2000年)など。

連絡先: nishio.michiko@ocha.ac.jp

【注】

1) Nida (1964) は、翻訳には、形式 (form) と内容 (content) の両面の等価性 (formal equivalence)

を重視する翻訳 (formal-equivalence translation)と、形式上の対応にはこだわらずに、受け手への効果という内容上の等価性 (dynamic equivalence) を重視する翻訳 (dynamic-equivalence translation) とがあるとしている。現実にとちらの等価性に比重をおいて翻訳するかは、翻訳されるものの種類や内容、翻訳の目的、対象とする読者の種類などさまざまな要因によって左右されるとしている。

- 2) Nida and Taber (1969) は、翻訳においてよくみられる意味上の変化として、具体性が高くなったり低くなったりことがあることを指摘している(p. 108)。
- 3) 本稿でデータ収集に用いた英語映画の DVD およびスクリプトは以下のとおりである。
Dave [DVD] アイバン・ライトマン監督 ワーナー・ホーム・ビデオ 2002
Love Actually [DVD] リチャード・カーティス監督 ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン 2006
The Sound of Music [DVD] ロバート・ワイズ監督 20世紀 フォックス ホーム エンターテイメント 2003
『サウンド・オブ・ミュージック』(スクリーンプレイ・シリーズ No.76)スクリーンプレイ 1996
『デーヴ』(スクリーンプレイ・シリーズ No.72)スクリーンプレイ出版 1995
『ラブ・アクチュアリー』(DHC 完全字幕シリーズ) DHC 2004
- 4) 本稿でデータ収集に用いた日本語映画の DVD は以下のとおりである。
『Shall we ダンス?』[DVD] 周防正行監督 角川ヘラルド映画 2006
『スウィングガールズ』[DVD] 矢口史靖監督 東宝 2005
『となりのトトロ』[DVD] 宮崎駿監督 ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント 2001
- 5) ダイアン・ナガトモ氏による。
- 6) ダイアン・ナガトモ氏による。
- 7) 英語圏での食事の前の祈りにはさまざまな種類がある。この字幕においては、台詞の「いただきます」に意味的に近い表現を用いる祈りを選んでいく。

参考文献

- Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E. J. Brill.
- Nida, E. A. and Taber, C.R. (1969). *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: E. J. Brill.
- 岡山徹 (2004). 「字幕の表記について」『ラブ・アクチュアリー』(DHC完全字幕シリーズ)DHC: 35.
- 牛江ゆき子・西尾道子 (2002). 「英語の映画における台詞と日本語字幕の比較: 文の要素の省略について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第55巻: 111-130.
- 牛江ゆき子・西尾道子 (2003). 「英語映画の日本語字幕における置き換え—虚と実のつながり」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第56巻: 115-132.

